

第21回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

静寂の中に 高津 秀俊（山梨県大月市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

大月市の北東に位置する岩殿山からの遠望富士。昨年2月20日の撮影になる作品で、厳冬期の雲を配した豪快な作品。大きく上部に富士山を置き、手前に半面朝日の当たった杓子山を配した単純明快で、且つ力に充ちた構図は近来にない名作と評したい。こうした作品は単にチャンスに恵まれた、というだけでは撮影できないものであり、氏の常なる精進が結集したものと絶讃に値するものである。

推薦

流雲

大内 京子（千葉県我孫子市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

第三番山頂・大蔵高丸からの作品で、昨年5月、雨上がりの静かな霧囲気中に沈潜した富士山の本質的な力を感じさせる作品。富士山を画面のやや左上方に置き、右下方に二筋の雲を配した技法は典型的ではあるが、安定した力を感じさせる。ただ、少々惜しいと思われるのは、富士山に日の出の光の一閃が欲しい。

推薦

雲間に焼ける

大戸 康世（山梨県大月市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

思い切って長焦点で引き寄せ、赤く焼け頂稜部を大きく作画したことで富士山のボリュームが際立ち、迫力も増した。通常の実現では周囲も入れ込むことが多いが、朝焼け部分の拡大がすべてに有利にはたらき、露出値との連携で前景の三ツ峠山が黒く沈み、山上のアンテナが目立たなくなったことも山のムードにプラスした。

市政60周年記念特別賞 市長賞

曙光に染まる 高橋 英子 (東京都大田区) 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

まさか作者が女性！と首を傾げたくなるほど力に充ちた作品。正面から富士に対し、一歩も引かぬ気迫が感じられる力作といえ、何のケレン味も感じられない。朝陽が富士山八合目まで当り、下部の帯状の雲にもその反面に光があるが、そのバランスも絶妙といえる。ことに右方、小さく頭をもたげたふたつの雲が生きている。左方山頂のアンテナは致し方ないだろう。

特選

霧中に一瞬 愛澤 和弘（埼玉県所沢市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

新雪と霧氷に飾られた大蔵高丸からの富士山。やや日ノ出時刻より時間的に遅く、富士山の山ひだの線が短くなり、刻みが浅くなった点が残念に思えるが、全体の調子は美しく、冷たさも表現されている。中央部の流雲の形に少し乱れがあるのは残念であるが、全体的なバランスにすぐれ、安定した実力の表現となっている。

特選

雨上りの朝 青木 菊麿（東京都品川区） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

推薦作・大内氏の作品と同様の構図であるが、大内氏の作が静の表現であるのに比して、こちらは流動感、すなわち雲の動きをもって画面に活力を与えている。しかし雲の動きがゆるやかで水平的のため、画面の感じはやはり静寂の気の漂うものとなっている。富士山の万華鏡的な多面性がうかがえる好作である。

特選

雲海染まる朝に

小林 和子（東京都昭島市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

日の出直後、いまだ朝の光の赤らみ消えない裡のカット。下半をまだ暁暗の闇の中に沈め、上半部に紅雲と高く突っ立つ秀麗な富士を置いた。典型的な朝富士の美観であり、それをみごとに再現した。強さや動きには乏しいが、“いかにも富士山”的な美しい作品である。左を明けた山頂の位置もみごとである。

入賞

静かに明ける

高津 秀俊（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簀史朗氏講評

雁ヶ腹摺山からの富士山は、十二景中小金沢山に奈良倉山次いで、牛奥ノ雁ヶ腹摺山と並びもっとも遠方にあるため、やや不利ともいえるが、その前景の山、形状は数等すぐれている。この作品はその形状と空気感を捉え、柔らかな裡に夜明けの曙の色を画竜点睛として浮かび上がらせたところが成功の因となった。出来得れば、もう少し長焦点レンズを使用したいところである。

入賞
深緑

大戸 康世（山梨県大月市） 姥子山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山に隣接するが、高度においてやや低い姥子山は、樹林の繁茂と前景が高くなる点から数等不利となる。この作品はその不利を承知で敢えて挑戦した。前景の樹々の肌の白が生きているが、若干ピントの甘さが目立つのは残念。こうした場合、前景の樹林が新緑に輝やく季節を狙いたい。それと富士の雪肌の白が飛んでいることも不利。印画引伸しの際の注意が肝要となる。

入賞

白き雲たなびく

谷口 一只 (埼玉県加須市)

牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

牛奥ノ雁ヶ腹摺山は、少し以前までアプローチが大変で、撮影を計画するひとは湯ノ沢峠から、また大峠から黒岳山を経由するか、または小金沢山から南下するほかなかった。最近の日川の左岸奥からの道が利用されるようになって大分楽になった。そのため、好作が次ぎ次ぎと登場する。この作品はやや下部が多く、季節が冬とういこともあって暗い。そのため、さらに長焦点レンズの活用を考えると有利に転ずる。これで下部が半分になったら、と希望するところだ。

入賞

笹原の上に望む

山下 政明（神奈川県秦野市）

小金沢山



白簾史朗氏講評

小金沢山は、十二景の山中、最も遠方であり、且つ樹林深く、前景もあまり良くない。そこに敢然と挑む意志は貴重である。不利とされる前景の笹原を出来得ればもっと近づいて笹の葉そのものを大きく撮り込むことによってもっとすっきりしたものとなり、形のおもしろさも生きてくる。できたら中景の黒い山肌もできるだけかくすこと、富士山上の空をもう少し空けることが望ましい。

入賞

清新な姿に 小林 和子（東京都昭島市） 大蔵高丸



白簾史朗氏講評

この作品は、あと一歩でもっと上位に躍り出る要素を多分に持っている。富士山の形、大きさ、入れ込み方、すべてがぴったりに型にはまって美しい。しかし下方黒い山波の部分がじゃまで中途半端的であること、中間部の雲も左が大きく、右に行く途上で消えてしまったことが惜しい。毅然として立つ霊峰の感じがそこで絶たれてしまい、まことに惜しい作品であった。

入賞

ツツジ咲く上に 内藤 均 (山梨県南アルプス市) ハマイバ



白簾史朗氏講評

破魔射場は他の地点に比して、地形的にあまり有利とはいえない。そこでアングル、モチーフに種々苦勞することになる。この作者も前景にツツジを配し、遠く残雪の富士を配するため、いろいろ苦勞していることがわかる。花も美しく、雪それなりに描写されているが、何か散漫さが残る。思い切ってもっと近づき、中間の花むらからローアングルで狙いたかった。多分中間のマツがかくれ、花と富士山のための構図となったと思う。

入賞

蒼空に雲躍る

奈木 正次（山梨県大月市）

滝子山



白簾史朗氏講評

滝子山からの撮影は制約が多い。そのためこの山を選ぶ人はまことに少ない。何しろ道は遠く険しく、加えてアングルの的に不利とあつては誰しも敬遠する。そこに敢然と挑むことは賞賛に値する。しかし、それと作品とは比例しない。“労多くして報われず”の例えが身にしみる。しかし、敢えてそれに挑んだ作者は富士上空に伸び上がる巻雲を捉え一幅の名画とした。その意気や壮、次回に期待大。

入賞

厳冬に佇む 愛澤 和弘（埼玉県所沢市） 笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

300ミリに2倍のテレコンバーターを装着しての望遠描写。そのためか、惜しやピントが少々甘い。どっかりと画面中央に置いた山姿は安定しているが、迫力と美に一段かけるのはそのためである。こうした場合、コンバーターを使わず、単レンズで撮り、大伸しした方がまだ良かったのではないかと考える。テレコンバーター類は、レンズ本来の鮮鋭さを大きく損なうことを考え、なるべく使用しない方が望ましい。

入賞

巖冬の朝 山崎 勝孝（神奈川県藤沢市） 奈良倉山



白簾史朗氏講評

十二景中、最も遠方にする奈良倉山は、前景の山も平坦に重なり合うのみで、極めて撮りにくい。望遠レンズ使用でもこの前景はいかんともし難い。作者はこの難物のモチーフに敢えて標準レンズに近い焦点距離のレンズで挑んでモノした。手前の山々を暗色でまとめ、処々に当る弱い光でコントラストをつけた。苦肉の策ともいえるが、それは成功への道であったといえよう。

入賞

大雪の朝 瀬沼 茂雄（東京都福生市） 扇山



白簾史朗氏講評

縦横十文字、横長と縦長三角形、単純化画面。構図に不可欠の要表を三通り組み合わせた典型的な技法。久々に技法に則った重厚な画面が登場した。そうは考えても、いざその場に至ると、仲々そうは考えられない。それをこの朝の光の色あせぬ時間内にまとめたことは並々ならぬテクニックである。このところ、このコンテストにあまり登場しなかったのが、どうしたのかと思っていたが、今回、みごとな復活を見せてくれた。幸いである。

入賞

朝霧漂う雪後の朝 村上 敏幸（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

すばらしい条件に恵まれ、思う様に撮影することができた日は、作家としての幸福を存分享受できる。

結果が不調であることも多い。まさしく天地が逆になるほどの転換といえる。この日は作者は前者であったろう。だが、選者としては惜しい！と思わざるを得ない。この作品の下方を切り、横位置としたら最優秀賞も夢ではなかったほど、すばらしい条件だった。

入賞

雪後の朝、青空に聳ゆ 二本木 勝 (東京都江東区) 岩殿山



白簾史朗氏講評

眼下いっぱいひろがる大月の市街ほか、諸々の物体。それらすべてを雪をまとった樹木の枝でかくし、自然の姿とした上に富士山を置く。このいたって簡単でありながら閑却されやすい技法をとっさに発想し、その応用への転換への速さがカギであった。通常は雑然とひろがる市街地が見えなくなっただけで、これだけの自然が復活する。まったく人間の考えはすばらしい。

入賞

燃える稜線

村上 敏幸（山梨県大月市）

お伊勢山



白簾史朗氏講評

この作者は、このコンテストに登場してからの成長と思われるが、非常にすぐれた発想と表現への技法を併せもっている。ことにこのお伊勢山での作品は実にすばらしい。雪のない裸の富士山は非常に撮りにくく、ともすれば箸にも棒にもかからないことがある。赤く焼ける稜線上の雲、千々に乱れ漂う雲、山肌。こうしたモチーフをひとつにまとめる造型力は末恐ろしいばかりの力を持っている。

入賞

夕照の山なみ 高橋 照雄（千葉県千葉市） 高畑山



白簀史朗氏講評

十二景中の富士山も、撮り難いものと撮り易い山とがある。ことにこの高畑山と、すぐ東に隣接する倉岳山がそうだ。山容は地味で目立たず、樹林に覆われ、陽は満足に当たらない。だが、今回の高畑山からの富士山は仲々良いチャンスを得た。ただし、このままではなく、もっと左と下方を切り、富士山のみアップとすることによって、画面は俄然生きてくる。

入賞

冬日和 奈木 新（静岡県裾野市） 倉岳山



白簾史朗氏講評

山体のほとんどが樹林に覆われ、周囲の展望も少なく、ことに富士山は特別、限られたものとなる。この山は民有地のため、樹木の伐採が思うようにいかないのである。したがって、いずれ別の山頂と交代を考える段階にきている。この作品は、そのじゃまになる樹林を逆に利用して、空いた僅かな空間からのぞく富士山を撮ったもので、作者の努力と苦心が如実に感じられる。早く別の山頂が決まればと、選者としても気が気ではない。

入賞

白雪輝く霊峰 村上 敏幸（山梨県大月市） 九鬼山



白簾史朗氏講評

倉岳山、高畑山と並んで、この九鬼山も変更を一考しなければならない十二景の山である。この山も民有地、ことにお隣りである都留市の住民の山でヒノキの植林が育っているので伐るに伐れない。富士山もほとんど見ることができなくなっている。この作品も山頂でなく、もっと下方地点からと思われるが、早く当局に善処をお願いしたいところである。

入賞

雪止みてたわわに

奈木 正次（山梨県大月市）

御前山



白簾史朗氏講評

この御前山も、臨時に九鬼山の代替山として十二景中の一山としてあるが、早くどちらかに決めなければならない。山頂は狭く、2人ほどしか立てないので、そのところも考えなければならない。ただ、アングルとしては九鬼山と同アングルなので利用できる。ことに市街地から近く、アプローチも楽なので大いに利用したい。この作品は垂れ下がる雪の枝を上方に配し、富士を下方に入れた。もう少し被写界深度を利用、ピントを鮮鋭に。

入賞

富士燃えつつあり

高橋 英子（東京都大田区）

高川山



白簾史朗氏講評

思い切って富士山を引きつけ、富士山の左方から巻き昇る雲を配した“逆いの字”構図は力強い。この場合、若干、露光不足だったことが、多少の色変化をとめない、逆に力が強くなったことにプラスした。これで山頂にもっと光が当たっていたら、と思うが、そうなればよりインパクトは強くなったと思う。女性の作品とはおもえぬ程の力がある。

入賞

初夏の富士 小谷 哲朗（三重県松坂市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

残雪新緑の候の山は、空気は爽やかで、周囲は眼にやさしい新緑。富士山の残雪も目を灼くほどの烈しさはない。この作品はそんな美しい季節を思わず思い起こさせるやさしい表現である。その表現と逆に、この本社ヶ丸は登るには仲々きびしい山である。高度はさほど高くはないが、不便でアプローチも長く、登りは急である。だが柔らかい風とあざやかな緑を賞でながらの一日を、とせず想起すやさしさをこの作者の本質だといえよう。

入賞

雲迫り来る 山下 政明（神奈川県秦野市） 清八山



白簾史朗氏講評

この清八山も富士山方面の樹木の繁茂で展望が限られつつあり、やはり他の数山同様、別の山頂に転換を考慮中である。この作品はやや調子が眠い（やや軟調）ため、折角のチャンスなのに迫力がいま一步である。もう少しコントラスト（空にも山体、雲にも）が欲しいところだ。そうなればきびしい冬富士の表情で天に届く富士の山姿が、見る人を瞠目させること請けあいである。

総評

審査員長 白簾史朗

本年で第22回と回を重ねる「秀麗富嶽十二景写真コンテスト」も、このコンテストを愛する多くの写真家たちの熱意に支えられ、本年も多数の応募を頂き、優秀な作品によってそのうちより26点、いままでを凌駕するすぐれた作品によって最優秀賞から、推薦、特選を頭に入選とも、常に勝る作品によって決定した。

総計26点の入賞者中、一点のみならず、複数から数点の入賞作品が選出されたのは、各作者のたゆみない精進と克己の精神によって生み出された作品であり、大いに喜ぶべき現象であった。但し、題名の付け方は未だしである。

この成果によって、この大月市秀麗富嶽十二景コンテストはさらに大きな前進を見せるであろう。そのことを主催者である大月市の文化に対する熱意と共に、選者もまた大いに期待するものである。